

人文学会創設六十周年に寄せて

二〇〇七—一〇一〇年度会長　寺沢　正晴

人文学会は、二〇一三の今年、創設六十周年の記念すべき年を迎えました。人間で言えば、めでたく還暦を迎えたことになり、まずは、お祝いの言葉を記しておかねばならないでしょう。おめでとうございます。

人文学会が創設された一九五三（昭和二十八）年は、戦後八年目、主権回復の翌年にあたり、日本人が、その日その日を生きることからようやく脱しつつあり、国の再建に向けて立ち上がった時期にあたります。人文学会の創設に関わった諸先生の回顧録や、創設期から一九六〇年代に至る『人文研究』に掲載されている文章の表題を垣間見ても、そのような背景があつたことが推察され、また、そのような時代に青春を生きた方々の熱意が感じられるように思われます。

その後、人文学会は、学園紛争の時代からバブルの時代を経て、平成時代へと、その歴史を進めてきたわけです。ここでは、それを実行する紙数を与えられてはいませんが、『人文研究』に掲載されている論説を、時代背景との関連で、社会心理学的に考察してみたら、興味深い結果が得られるのかもしれません。（人文学

会創設期と、半世紀に渡るその歴史に関しては、『人文研究No.150』を御覧ください。)

私が会長職を務めさせていただいた、二〇〇〇年代後半の時代背景と言えば、経済は最悪の状態にあり、民主党への政権交代などということもありましたが、日本が閉塞感に覆われた時代でした。また、組織トップの名称は、委員長から会長に、学生機関誌の名称は、『世代』から『i-plus』に変更され、ホームページの作成等、IT化も進められて間もない時期にあたりました。あるいは、人文学会がそろそろ老年期にさしかかっていたこともあるのかもしれません。もちろん、私の怠惰のせいもあることでしょう。この時期の人文学会には、特記するような目覚ましい成果は、残念なことに、ありません。

とはいって、この時代に起こったいくつかの変化も、記録しておきましょう。

本学諸学会の主要な経済的基盤は、学生（実質的には、学生の保護者）にあります。しかし、本人文学会は、その基盤となる学部が創設当初は存在せず、後に基盤となつた外国語学部のみでは弱小であつたために、初めは法経学会の、後には法学会および経済学会よりの経済援助をいただいて、学会運営を行つて参りました。ところが、先代会長の時より、人間科学部の創設を機に、法学会・経済学会が援助打ち切りを通告してきたのです。私は、人文学会自立のために、その通告を、むしろ誇りをもつて受け入れました。その後の本学会総会において厳しく追求されたことは、苦い思い出です。

もう一つの変化は、学生からの投稿が、『懸賞論文大会』という名称から、やや乖離してきたために、それを、『学生文化奨励賞』へと変更したことです。それとともに、現代学生の趣向の変化にあわせて、投稿可能なジャンルとして、映像作品・漫画・音楽等も、試みに加えてみました。これに関しては、時代の変化に対応

させて、今後も様々な部門を、取捨選択して行けば良いのではないかと思います。
いずれにしても、すでにできあがっていた人文学会の活動を継承することに追われ、大きな変革はできませんでした。

本年、創設六十周年を迎えた人文学会は、ルネッサンス、つまり、再生の時を迎えたことになります。これを感じ、再び草創期の熱気と活気をとりもどすことを、影ながらお祈りして、この短い文章を終わらせていただきたいと思います。

平成二二五年一月二三日